

## 学生の看護観の発展過程に関する研究

—— 4年次生臨地実習報告書の質的分析をとおして ——

栗原 保子      小野美奈子      稲田 夏希

### 【抄 録】

本研究の目的は、4年次における実習報告書の質的分析から、学生の看護観の発展過程を明らかにし、教育課程との関連を点検・評価することである。学生より提出された実習報告書15事例を研究対象に分析を行った。分析対象となった2事例の中、臨地実習のねらいに即して最も典型的でありかつ対象に良い変化をもたらしたと思われた1事例の分析結果より、学生の看護観の発展過程の特徴として以下のことが明らかになった。

- ・実習初期の段階で、《三重の関心》を注ぐ思考のプロセスを修得していた。
- ・実習初期の段階で、《三重の関心》を注ぐ《訓練をする》こと、そしてその過程を《自己評価》していくこと、すなわち、実践方法論の適用の意味に気づき、その理論を、その後の実習で意識的に活用していた。
- ・第一の関心の注ぎかたの特徴から、専門的知識の強化と健康な部位を含めた全人的な像の形成という課題を確認できた。
- ・実習初期の段階で、看護に最も必要とされる立場の変換能力を修得していた。
- ・看護の対象を、家族全体としてとらえるという認識が形成されていた。
- ・情報の共有とチームによる協働が看護の質を高めるという気づきから、チーム医療の中の専門職者としての自己の位置づけを明確にしていた。

以上より、実習初期の段階で、看護を展開する技術論としての実践方法論の意識的活用を促すことと自己評価能力を高める実習・授業展開が重要であるとの示唆を得た。

【キーワード】 教育課程の評価、臨地実習、三重の関心、学生の看護観

### I 序論

#### 1. はじめに

本学の教育課程は、ナイチンゲール看護論及びナイチンゲール看護教育論を土台に据えた教育実践の仮説検証的取り組みである<sup>1)</sup>。

このような理論枠組みで構築された独創的な教育課程が、教育の主体である学習者にどのように学ばれているのか、看護基礎教育として適切かという観点から評価することは、今後の教育の改善や看護学の発展のためにも必要不可欠な活動である。

そこで、本学4年次の臨地実習Ⅲにおける実習報告書の分析から、学生の看護観の発展過程を明らかにして学生がどのように理論を実践に活用している

かを評価したところ、若干の示唆を得ることができたので報告する。

#### 2. 臨地実習の位置づけと展開

本学の教育課程における臨地実習は、体験・統合科目に位置づけられている(図1)。

臨地実習のねらいは、ナイチンゲールの看護の定義《看護とは生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることである》及び看護教育論のキーワード《教育とは、人間をつくりかえることを目的として与えられるべきである》を基盤に、《ベッドサイド》で、《三重の関心》を注ぐ《訓練をする》こと、およびその訓練過程を《自己評価》しながら《終生》学び続ける姿勢づくりを形成する<sup>2)</sup> ことにある。

実習方法論は、《三重の関心》を注ぐ《訓練をする》ことおよびその訓練過程を《自己評価》すること、すなわち、看護を展開する技術論としての実践方法論の活用である。

### 3. 主な用語の概念規定

三重の関心を注ぐ：

看護過程の展開において、対象に第一の関心（知的な関心）、第二の関心（心のこもった人間的関心）、第三の関心（実践的・技術的な関心）を注ぎ、対象のもてる力を最大限に働かせる方向でケア手段を具体化する<sup>3)</sup>ことをさす。

看護観が発展する：

自己の看護実践を通して、対象の変化における看護者の関わりを、看護一般、すなわち、看護とは生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることである、に照らして事実に論理的に意味づけ<sup>4)</sup>、その過程を看護し得たかという観点から自己評価し、看護者としての自己の課題を見出していくことをさす。

## II 研究対象と方法

### 1. 研究対象

臨地実習Ⅲにおける基礎看護学担当領域の学生より提出された実習報告書15事例。

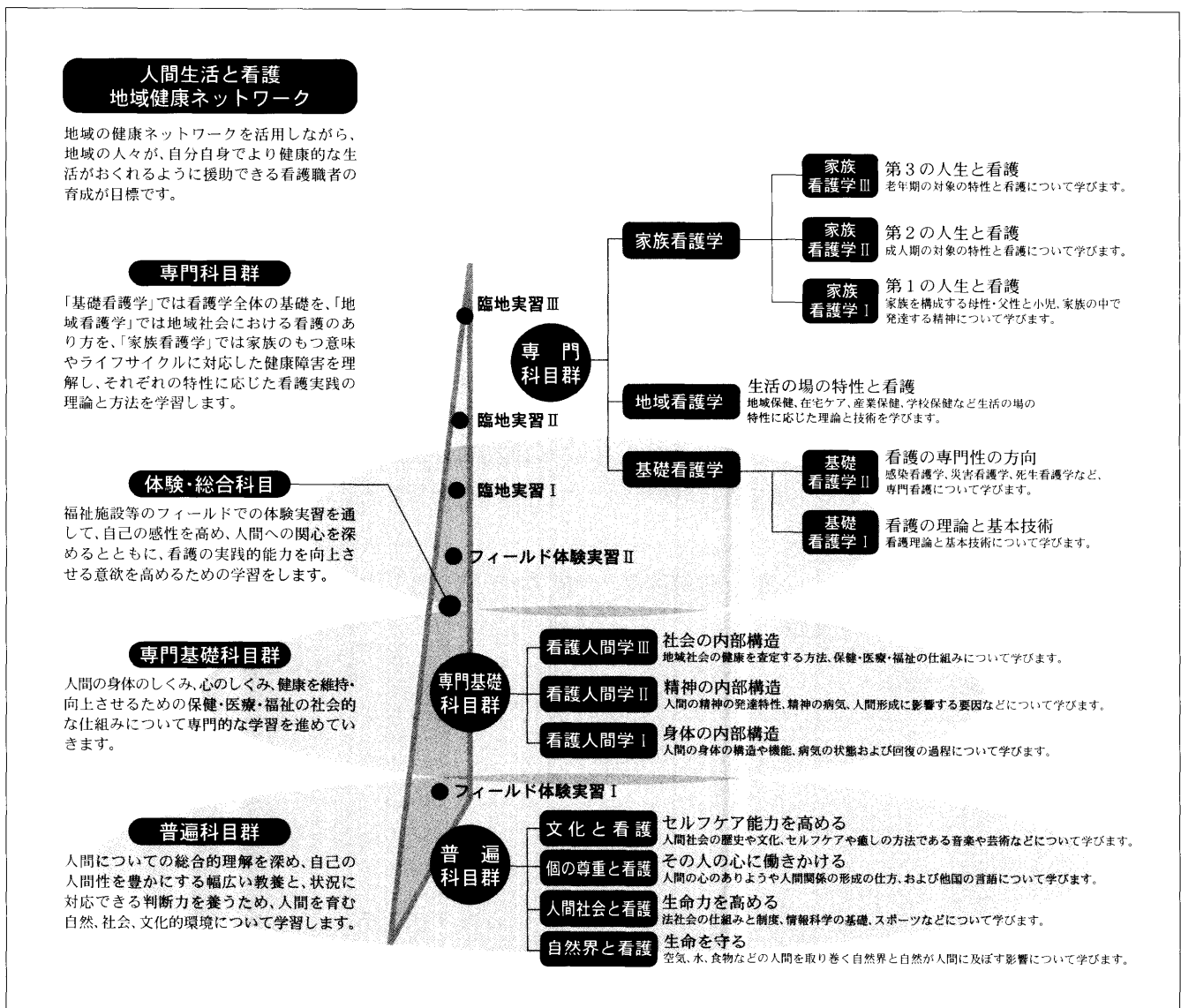


図1 教育課程の概念図（宮崎県立看護大学 臨地実習Ⅰ実習要項 より抜粋）

## 2. 研究方法論の選定および方法

本研究では、学生の認識を研究対象とすることから、人間の認識を唯物論的立場からとらえた三浦の科学的認識論<sup>5)</sup>を基盤にする薄井の看護学の学的方法論<sup>6)</sup><sup>7)</sup>を基盤とした。

### 1) 研究素材の作成

- (1) 提出された実習報告書を精読する。
- (2) 実習課題内容である目的・目標〈主体的に選択した領域において、チームアプローチを含めて看護の総合的能力を高め、自己の看護観の発展をめざす。展開した看護現象から自己の看護観を論理的に表現する〉と突き合わせ、看護観の発展の軌跡が、臨地実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとのつながりで事実に表現されている報告書を、(1)の中から選び出す。
- (3) 縦軸に時間的経過（臨地実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、横軸に、〈体験の内容〉〈体験を通しての学び〉〈記述内容から読みとれる学生の認識の特徴〉からなる分析フォーマットを作成する。
- (4) 分析フォーマットに、報告書から抽出したキーワードを、〈体験の内容〉〈体験を通しての学び〉欄に記入する。

### 2) 分析方法

- (1) 記入したキーワードをもとに、「自己の看護観の発展についてどのような意味があったととらえているか」という観点から、学生の認識の特

徴を描き、〈記述内容から読みとれる学生の認識の特徴〉の欄に記入する。

- (2) 記入内容については、実習記録をもとに、学生及び直接実習指導者との面接を行い、突き合わせを行う。
- (3) 以上から、学生の看護観の発展過程と実践方法論の修得との関連について分析・考察する。

尚、研究素材の作成及び分析過程においては、共同研究者及び本研究方法による実績のある研究者によるスーパーバイズを受けた。

### 倫理的配慮について

研究成果の公表については、分析対象となった学生及び直接実習指導者に研究目的を説明し了解を得た。看護の対象については、特定できないように表現に留意した。

## Ⅲ 結果

研究対象とした実習報告書（15事例）の中、実習課題内容である目的・目標と突き合わせ、看護観の発展の軌跡が、臨地実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのつながりで事実に論理的に表現されていると共同研究者間で合意できた実習報告書は、2事例であった。実習報告書の多くは、臨地実習Ⅱ、Ⅲとのつながりで、あるいは臨地実習Ⅲに焦点をあてて事実に記述していた。

作成した分析フォーマットについては表1に示す。

表1 臨地実習 分析フォーマット

	実習施設	病棟	氏名
実習	〈体験の内容〉	〈体験を通して、どのような学びをしたと記述しているか〉	〈記述内容から読みとれる学生の認識の特徴〉
臨地実習Ⅰ			
臨地実習Ⅱ			
臨地実習Ⅲ			

以下、学生の看護観の発展過程の特徴として、本学の臨地実習のねらいに即して典型的であり、かつ対象に良い変化をもたらしたと評価できた1事例の

分析結果(表2)の過程を中心に述べる。

尚、〈…〉で示す内容は、学生の記述・面接内容から抽出したキーワードである。

表2 臨地実習 分析フォーマット

実習施設：K・M病院		病棟：(内科・眼科)	氏名：S・T
実習	〈体験の内容〉	〈体験を通して、どのような学びをしたと記述しているか〉	記述内容から読みとれる学生の認識の特徴 注：〈 〉内は事実
臨地実習 I	<p>79才。女性。小脳梗塞(左)。糖尿病、高脂血症、骨粗鬆症。めまい、下肢のふらつき症状。点滴と服薬の治療。入院後7日目現在、梗塞症状安定。血圧156/74mmhg。血糖136mg/dl。</p> <p>食事は糖尿病食。次男家族と二世帯住宅。現役の主婦。</p> <p>セルフケア能力の維持や生活行動の自立が課題、心身共にできるだけ良い状態へ。</p> <p>実習初日の昼食後、「お茶(水分)は食後に一口飲めばもう十分」と言って、軽く一口のみ飲む。どのような内部環境？糖には粘性。水分不足では血液がうまく流れない。疾病への理解は？入院前から塩分を抑えた食事に気を付けていた。健康に関心あり。</p> <p>意味を認識できる方なので、看護者の働きかけで、生活過程をより健康に整え、悪化を予防し、生活レベルの維持へという思いを抱いた。関わる中で、患者から、脳の障害は、「若い頃からの外傷の積み重ねの結果」と。</p> <p>身体の中をイメージしてもらい、治療の意味がわかり、回復の方向へ。</p> <p>実習5日目。水分摂取の必要性と摂取量の説明、身体の状態と疾病との関連性について、パンフレットを作成して説明(内容は?)、一緒に考えていったところ、「頭を打ったからとばかり思っていた。水分をとることの意味がわかった。これを守りたい。毎日、パンフをみる」との発言あり。</p>	<p>対象特性を捉え、自らの人間的な関心を寄せて関わったことで、患者の思いや考えを引き出し、患者自身が身体や疾病のことについて意識でき、一般と個別性を踏まえた看護の方向性が見いだせたのではないかと考えた。</p>	<p>健康障害の種類(糖尿病・高脂血症、小脳梗塞)と健康の段階(梗塞症状安定)と〈水は食後の一口で十分〉対象の反応の意味を、〈糖は粘性、血液ながれにくい〉と身体の内部環境とのつながりで押さえ、〈疾病への理解は?〉と、表現から対象の認識に注目。</p> <p>対象の反応から、対象の持てる力に着目し、看護の方向性を大づかみに描いている。</p> <p>方向性を描きつつ、関わる過程で、得られた対象の反応の意味を、学生が描いたケースの看護の方向性と重ねて意味づけし、疾病への理解が不十分と認識し、看護の方向性を定めている。必要なケアを実施。患者の表現から、意識化できたとなえ、個別性を踏まえた看護が展開できたと評価している。</p> <p>つまり、看護の方向性を定め、個別な看護を行うには、対象特性(第一の関心)をとらえ、人間的関心をよせて(第二の関心を注ぐことで)、対象の認識を浮き彫りにして関わるのが大切。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>体験をとおして、三重の関心を注ぐことと使うことの意味に気づいている。三重の関心を注ぐ思考のプロセスがよみとれる。</p>
臨地実習 II	<p>1才3カ月。先天性股関節脱臼の女子。定期検診、異常なし。1才頃、歩き方の異常で、受診・入院。スピードトラック牽引にて整復後、垂直牽引開始。包帯による皮膚のすれあり。泣いてぐずったり、全身の力を使って抵抗する。</p> <p>幼児期は、心身共に発達途上の段階。局所の回復を促すと同時に、豊かな心身の成長・発達が妨げられないようにしたい。良肢位の保持、障害を起こさないよう観察、巻く強さを考え、蒸しタオルによる清拭、マッサージ、日中おもちゃで遊んだり歌を歌うなどの関わりを実施。</p>	<p>最終のフィールド(6クール目)で、新たな学び。</p>	

<p>臨地実習 II</p>	<p>対象の発達段階において家族は特別な存在。家族を含めた看護を。家族に生じた課題に対し解決の方向性を見出し、適応しながら生活を調整していけるようになって欲しい。</p> <p>父親の対象への入浴後のおむつ替えの行為(両足首を片手で持ち上げておむつを敷き込もうとした)をみて、関節への負担と考え、お尻を支えてもちあげた(手伝った)。</p> <p>おむつ等による下肢の伸展内転位での固定などによる後天的要因も原因の一つ。おむつ交換の誤った方法の積み重ねによる可能性もあるのでは？</p> <p>お尻をもちあげる必要性について話す、「家内も脚をあげていたような気がする。このせいで、脱臼がおこったのかもしれないですね」と。このことに責任感を感じないように、対象が回復へ向かっていると、家族がスキンシップを多くもつことが快となることを話した。この後、両親は、お尻を持ち上げて、実施。家族は、疾病や状態について理解し、どのように関わっていけばよいかということがわかってとても安心しており、このことをチームに返すことによって看護の方向性が見いだせた。</p>	<p>家族に生じた課題に対し解決の方向性を見出し、適応しながら生活を調整していけるようになって欲しいという認識を持って関わることで、対象だけを見ていたときは異なる多面的な捉え方ができ、看護の方向性を考えることができた。</p> <p>対象だけではなく、家族などの社会関係にも広い関心に向け、家族の立場や認識を考えて、対象全体を整えていけるように関わるのが大切。</p> <p>I, IIの学びから、対象やその対象をとりまくすべてに、人間的な関心をよせ、事実を捨象し意味を捉えていくことから看護の方向性が見いだせるのではないかと思った。</p>	<p>幼児期の発達段階の特徴から、対象にとっての家族の意味をとらえ、家族に生じた問題としてとらえ、家族全体を看護の対象としている。</p> <p>〈下肢の過度な進展は関節への負担〉(脱臼はおむつ等による下肢の伸展内転位での固定などによる後天的要因も原因の一つ)専門的知識を呼び起こし、〈おむつ交換の誤った方法の積み重ねによる可能性もあるのでは？〉と、疾病に至った過程と家族の関わりを重ねて捉えている。</p> <p>対象と対象の発達段階の特徴を社会関係(家族)とのつながりでおさえ、家族の健康上の問題という捉え方と、立場の変換をしつつ、関わりをもたせることで、ケアの対象の広がり(家族全体)を、理解できた。</p>
<p>臨地実習 III</p>	<p>67才。女性。喘息。入院後10日目。ベッド上安静から酸素吸入中止。生活行動の拡大の時期。</p> <p>1週間以上清潔が保たれていない(上肢と首を拭くのみ)。排泄物を取り除く必要。「きつくてできないところはやりますよ」と声をかけるが、拒否。</p> <p>なぜかを頭の中を考えながらコミュニケーションを図ると、「風邪をひいて喘息をぶりかえすのでは」と。バイタルは安定。排泄物の除去。快の感情を。回復に必要なこと。</p> <p>患者が脚を掻いている場面。今が良い機会、「下肢を蒸すことで痒みが取れるかも、十分に温めて、身体を冷やさないようにしましょう」と声をかけ、実施。「気持ちよい」と喜び、その後、足浴、清拭、洗髪が実施できた。次は、入浴を行おうという段階まで進んだ。</p> <p>このプロセスをナースに報告。 ナース:「そうだったの。ありがとう。今度は入浴ね」</p>	<p>相手に暖かい関心に向け、対象特性と照らしあわせながら事実の意味をひとつひとつ考えたことによってできたこと。</p> <p>看護師それぞれが行ってきた看護の意味付けをしっかりと行い、チームに表現して共通理解を図ることによって対象を多面的に捉えたり、よりよい患者の個別性にそった看護を展開していったと思った。</p> <p>患者の考えや思いを一方向的に押し込め込まないことや、患者の認識を理解して援助することについて、その意味を論理的に表現してチームや他の学生と看護の方向性について考えられたことが良かったと思う。</p> <p>実習を通して、発展してきた看護観は、対象や対象を取り囲むすべてに対して温かい関心を注ぎながら、そのひとつを見つめ、事実の意味を捉えて看護を行っていくことだと考える。</p>	<p>第一の関心をよせ、対象の〈拒否している〉の認識を探ったところ、〈風邪…ぶりかえす〉と回復へのマイナスイメージを持っていることがわかり、第一の関心に照らし、必要なケアを実施するにあたり、看護の効果を妨げないかを、〈バイタルは安定〉と対象の状態から判断しケアの可能性を見極め、看護の方向性を定めて、対象の心が動く機会(脚を掻いている、今が良い機会)を観察し、心が動くような働きかけを行って、ケアを実施している。対象の反応から、看護でき、さらに、看護の発展がみられたと捉えている。</p> <p>心と体の刺激となるようにと、手段の幅が広がり、必要なケアの実施の確実性が高まってきている。</p> <p>情報の共有とチームによる協働が看護の質を高める。</p>

臨地実習Ⅰでは、初日より、学生の認識は、食後の〈水は、食後に一口飲めば十分〉という対象の表現に、健康障害の種類〈糖尿病・高脂血症と小脳梗塞〉と健康の段階〈梗塞症状安定〉と重ねて、〈内部環境は?〉と対象の身体の中をイメージし、〈糖は粘性…〉と内部環境とのつながりで押さえ、〈疾病への理解は?〉と対象の表現から認識に注目している。さらに、〈現役の主婦、塩分を抑えた食事〉生活過程の特徴と重ねて、〈健康に関心…働きかけで意味を認識できる〉とケースの特徴を押さえて、〈生活過程をより健康的に…〉と看護の方向性をおおづかみに定めている。関わりの過程で、小脳梗塞の原因について、〈外傷の積み重ねの結果〉という対象の表現から、〈身体の中をイメージ…、治療の意味がわかり、回復の方向へと〉看護の方向性を定め、〈身体の状態と疾病の関連…描けるパンフの作成、説明〉と必要な看護を実施している。〈頭を打ったからとばかり、…水分をとる意味がわかった…守る〉という対象の表現から、対象の認識に変化をもたらしたと評価している。この一連の看護過程をとおして、〈対象特性をとらえ(第一の関心)、…人間的関心をよせ…、患者の思いや考えを引き出し、患者自身が…疾病…意識でき、一般と個別性を踏まえた看護の方向性が見いだせた…〉と、《三重の関心》を注ぐことで対象に必要な看護が実施できた、つまり、《三重の関心》を注ぐ訓練をしていくことの大切さを実感していることが読みとれる。と同時に、実習初期の段階で《三重の関心》を注ぐ思考のプロセスが身についていることもわかった。

また、学生との面接をとおして、以下の特徴もとりだせた。

第一の関心の注ぎ方の特徴として、小脳梗塞の部位(左)を把握し、その特徴を、〈細胞の一部が壊死し運動機能・平行感覚に障害が起こっている状態〉と位置づけ、梗塞の結果生じた機能障害〈バランスがとれない、筋力低下〉に着目し、〈筋力アップと転倒予防〉と、持てる力を引き出す、悪化させないという看護の原則の押さえであった。良い血液が流れていくこと等細胞の作り替えを促進させるということは押さえてはいたが、小脳一般とのつながりで、小脳右部位の健康部位への刺激を送り、神経回路の再構築を促すという意識は落ちていたという特徴もとりだせた。

臨地実習Ⅱでの学生の認識の発展で特徴的なことは、最終フィールドにおいて、対象の発達段階の特徴から、対象にとっての家族の意味をとらえ、疾病にいたった過程を家族の関わりと重ねて、〈おむつ交換の誤った方法の積み重ねでは?〉と家族の健康上の問題という捉え方をしていることである。ケアの必要性について説明したところ、家族の〈脚をあげて…脱臼の原因かも…〉という表現から、〈責任を感じないよう〉と家族の位置から追体験をし〈…回復にむかっている…スキンシップが大切…〉と、治療の効果と家族がケアに参加することの意味を表現し、関わりをもったところ、〈お尻をもちあげて実施〉と家族の行動が変化した。この変化から看護できたと評価している。この一連の看護過程から、〈対象だけではなく、家族などの社会関係にも関心を向け…、対象全体を整えていけるように関わるのが大切〉と、看護の対象を個から家族と、家族全体として捉えるということ、実感をもって理解している。

臨地実習Ⅲでは、対象に第一の関心をよせ、対象の〈拒否している〉対象の認識を探ったところ、〈風邪…ぶりかえす〉と回復へのマイナスイメージを持っていることがわかり、第一の関心に照らし、必要なケアを実施するにあたり、看護の効果を妨げないかを、〈バイタルは安定〉と対象の状態から判断し看護の方向性を定めて、〈脚を掻いている、今が良い機会〉と対象の心が動く機会を観察し、〈…蒸すことで痒みがとれるかも、…温めて…、身体を冷やさないように…〉と、心が動くような働きかけを工夫して関わり、ケアを実施している。対象の反応から、看護でき、さらに、〈洗髪、…入浴を行う〉と看護の発展がみられたと評価している。

看護の効果を上げるため、ケアの前の〈バイタルの観察〉と、現在の対象の身体の状態を確認し、対象の位置からケアの可能性を見極めるという行為や、必要なケアが実施できるよう機会を伺うなど、必要なケアの実施への確実性が高まってきている。

また、単にケアを実施したという報告ではなく、〈取り組むプロセスとケア内容を報告〉したことで必要な情報の共有化ができ、担当ナースの〈今度は入浴ね〉と、ケアの継続性へとつながる表現を得ている。この一連の看護過程から、〈看護者…意味づけを…行い、チームに表現して共通理解…対象を多面的に捉えたり、

より良い患者の個別性にそった看護を展開していける)と、情報の共有とチームによる協働が看護の質を高めるという認識へと発展していることがわかった。

#### IV 考察

学生の看護観の発展過程の特徴と教育課程との関連から、主に、1. 学生の看護観の発展過程の特徴について、2. 実践方法論の修得について、に焦点をあてて考察する。

##### 1. 学生の看護観の発展過程の特徴について

学生の看護観の発展過程の特徴として、実習初期の段階で、《三重の関心》を注ぐプロセスを学生自身の力でたどっていることがわかった。このことは、《三重の関心》を注ぐ思考のプロセスが身についていると読みとれる。また、個別性をみつめ、必要な看護を対象の状況にあわせて実施できたという実感から、《三重の関心》を注ぎ《訓練をする》のこのの意味と意識的な活用を認識していることがわかった。

第一の関心の注ぎ方の特徴として、小脳梗塞の特徴を、〈細胞の一部が壊死し運動機能・平行感覚に障害が起こっている状態〉と位置づけながらも、〈バランスがとれない、筋力低下〉と梗塞の結果生じた機能障害に着目した看護の原則の押さえであった。このことから、障害された部位は人間が生きて生活していくうえで本来どのような働きをしている部位かという視点はあることがわかる。しかし、学生の認識に、神経一般をとりだすための専門的知識や持てる力を引き出すための健康な部位を含めた全人的な像が確実なものになれば、さらに看護の発展があったと考えられる。

学生は、初めて対象を受持ち看護するという臨地実習Ⅰの段階で、対象の表現や反応に注目し、その意味や認識を、対象の位置から能動的に描こうとしていた。このように対象の認識を積極的に予想しようとする取り組みについて、薄井は、どのような小さな言動でも対象の生物体・生活体の両側面からみつめると、その言動につながる物質面の根拠と精神面の影響因子がみえてきて看護の必要性が認識しやすくなるし、どうすればよいかの見通しができて実施しやすくなる<sup>8)</sup>と述べ、《三重の関心》を注ぐ《訓

練をする》プロセスで看護者に最も要求される基本的能力としている。この立場の変換能力について、F.ナイチンゲールは、Notes on Nursingの中で、看護の仕事ほど、自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力をこれほど必要とする仕事は他に存在しない。この能力を持っていないのであれば看護から身を退いた方がよいであろう<sup>9)</sup>とのべ、この能力の重要性を明確に指摘している。今回の事例では、この立場の変換能力が、実習初期の段階で身につけていることが確認できた。

様々なライフステージ・健康の段階の対象を看護する臨地実習Ⅱにおいても、《三重の関心》を注ぐという思考のプロセスで看護過程が展開されている。対象だけではなく対象をとりまく家族への追体験をしたことで、看護上の問題が明確になり看護できたという実感から、看護の対象の広がりを個から家族全体と実感を伴って認識していることがわかった。

臨地実習Ⅲ、つまり、実習の最終段階では、《三重の関心》を注ぎ、必要な看護を対象の状況にあわせて実施することの確実性が高まっていた。これは、《三重の関心》を注ぐ《訓練をする》、その訓練過程を《自己評価》するという学びのプロセスの繰り返しがあったことと、実践の基盤となる専門的知識の広がりや深まり、洗練されてきた看護技術の実施によると考えられる。また、情報の共有とチームによる協働が看護の質を高めるという認識へ発展しており、チーム医療の中の専門職者としての自己の位置づけを明確にしていることがわかった。

以上のことから、学生の看護観の発展には、実践方法論の意識的活用と、看護するための観察能力、立場の変換能力、表現技術能力、自己評価能力の修得が重要であることがわかった。

##### 2. 実践方法論の修得について

《三重の関心》を注ぐ《訓練をする》ことの大切さを実感したことから、その理論を意識的に実践に活用し、その訓練過程を自己評価しながら、専門職者としての自己をつくりあげている過程が確認できた。つまり、実践方法論の意識的活用と自己評価能力の修得を確認できた。薄井は、自己の看護過程を客観視することによって、知っていても使えなかった理論が、自己の体験から抽象した理論へと変わり、そ

の後の実践では意識的な対応に近づくよう導いてくれることになる。これを理論の再措定といい、自己の看護観を一貫したものにするために不可欠な取り組みである<sup>10)</sup>としている。臨地実習に臨む前までには、この実践方法論の修得を目指した講義や演習が繰り返し行われている。しかし、今回のように、対象の良い変化をとおして看護できたという実感が、理論の意識的活用につながるとすれば、実習初期の段階で、学生が看護できたという達成感をもつような実習指導への取り組みと自己評価能力の修得が重要であることがわかった。戸田は、自己評価能力の修得と実習段階との関連から、振り返り学習の意義について、基礎実習では、教師が専門的知識や技術を学生の認識のレベルに応じて補うので、学生は看護できたという実感を持って終了することが多いが、領域別実習から総合実習へと次第に自立への道を歩む際には、場所も状況も異なる新しい看護現象に遭遇する。自己評価能力が不十分であると、不全感を自力で解決できないまま実習につまづくことになる<sup>11)</sup>と述べ、実習中の感性的段階の自己評価能力を、理性的段階にまで高めることが自力で不全感を解消させる方向へと導く<sup>12)</sup>と報告している。本学でも、臨地実習Ⅰ実習終了後に、実習における看護の体験を振り返り、看護する能力の到達度を自己評価し学習課題を定めるとい科目を設定している。この振り返り学習の中で、いかに、学生の自己評価能力を高めておくかが課題であるといえよう。そして、臨地実習Ⅰにつながるその後の実習展開での自己評価の定着が重要になると考える。

## V おわりに

1 事例の分析結果報告ではあるが、同一学生の看護観がどのように形成され発展していくのか、その特徴を縦断的に浮き彫りにできたことで、今後、学生の認識を捉えやすくなると考える。しかし、学生の看護観の発展過程の構造には、学生のレディネス、実習場の特性等により、今回明らかにできなかった構造もあると予想される。今後、分析対象を増やすことで、その点をより明らかにしていきたい。

また、学生の看護観の発展を促す実習指導における指導者の臨床能力及び指導能力の向上については、

今後の課題として検討していく必要がある。

## 引用文献

- 1) 薄井坦子：ナイチンゲールの夢を宮崎に，総合看護，33(2)：7，1998.
- 2) 薄井坦子：ナイチンゲールの夢を宮崎に，総合看護，33(2)：8，1998.
- 3) 薄井坦子：科学的看護論，第3版，107-108，日本看護協会出版会，1997.
- 4) 薄井坦子：科学的看護論，第3版，108，日本看護協会出版会，1997.
- 5) 三浦つとむ：認識と言語の理論 第一部，勁草書房，1967.
- 6) 薄井坦子：看護学探求の本流を求めて，千葉看護学会誌，1(1)：1-7，1995.
- 7) 薄井坦子：ナイチンゲール研究はどこまで進んでいるのかー理論看護学の立場からー，ナイチンゲール研究：2号，4，1994.
- 8) 薄井坦子：科学的看護論，第3版，72，日本看護協会出版会，1997.
- 9) Nightingale, F.; Selected Writings of Florence Nightingale, 湯楨ます監修，薄井坦子，小玉香津子，田村真，金子道子，鳥海美恵子，小南吉彦編訳，ナイチンゲール著作集，第一巻，365，現代社，1986.
- 10) 薄井坦子：改訂版 看護学原論講義，134，現代社，1994.
- 11) 戸田肇：学生の看護職者への認識の形成と発展過程，千葉看護学会誌，2(2)：38-46，1996.
- 12) 前掲書11)，44



# Study of the Developmental Process in Student's Recognition as a Nurse

— Analysis of Fourth Year Student's Practicum Reports —

Yasuko Kurihara    Minako Ono    Natuki Inada

## **【Abstract】**

In this study, a senior student's clinical practicum report was analyzed by scientific abstraction to evaluate the curriculum and the developmental process of student's recognition as a nurse through clinical practicum was made clear. One student's report was chosen out of 15 reports because of the representation referred to the objective of the clinical practicum.

The results are as follows:

1. Early in the practicum, the student already developed the threefold interest thinking process (through former lectures).
2. Early in the practicum, the student also realized the need for such an approach and began disciplining themselves to this approach.
3. Holistic nursing practices coupled with specialized knowledge helped strengthen the student for their case management of their client's health and well-being.
4. Early in the practicum, students learned "the power of throwing oneself into other's (clients and family members) feelings."
5. Student's realization of nursing not for clients only, but for the client and family as well.
6. An acute awareness of the professional level of recognition that they must acquire in the future to become competent nurses.

**【Key Words】** Curriculum evaluation, Clinical practicum, Student's recognition as a nurse, The threefold interest

---

Yasuko Kurihara, Minako Ono, Natuki Inada : Miyazaki Prefectural Nursing University